

謹んで浄土真宗を案ずるに、二種の回向あり。一つには往相、二つには還相なり。往相の回向について、真実の教行信証あり。それ、真実の教を顕さば、すなわち『大無量寿経』これなり。

(『教行信証』聖典一五二頁)

顕真実教

第17組 大昭寺住職

中野 誠二

text by Seiji Nakano

ご門徒の命終

昨年暮れ、若い時から総代をされ、長年にわたってお世話になった、お寺の顔ともいふべき一人のご門徒が亡くなられた。その方は、報恩講をはじめとする年中行事のほぼすべてに参詣をし、また月に二、三度はお寺に顔を出してくださった。幼い頃から兄弟四人みな「かっちゃんおじさん」と呼び、よく遊んでいただいた。

ご自宅の大きなお内仏の中には『御文』があがっており、その左右の下すみに深く刻まれている窪みと手垢が、代々にわたって読まれてきたことを物語っている。私が「お元気ですか」と聞くと、いつもニコニコしながら「根性だけは曲がとる」と答えられていたのが印象深い。おそらく、ご自身に至るまで脈々と伝承されてきた仏法聴聞の証が、この言葉となってあらわれているのであろう。古くて大きなその家からは、浄土真宗の伝統に根差した息吹がひしひしと伝わってくる。

浄土真宗とは

親鸞聖人は、『教行信証』全体を貫く主題ともいふべき意を、「大無量寿経真実の教浄土真宗」（聖典一五〇頁）と述べられる。『大無量寿経』に「真実の教」を聞きとられ、これによって開かれてくる自覚道としての仏道を「浄土真宗」とあらわされた。この標拳の文をうけて「教巻」冒頭では、「謹んで浄土真宗を案ずるに、二種の回向あり。（中略）それ、真実の教を顕さば、すなわち『大無

量寿経』これなり」(聖典一五二頁)と、あえて順序を逆にして確かめ直されている。もし、標拳の文のみであるならばそれを証明するだけの論拠、すなわち、教相判釈を必要とする。しかし宗祖は、真実の教をあらわす「教巻」において、一切の教判を用いない。そこには、『大無量寿経』に説かれる本願は、「凡小を哀れみ」「群萌を拯」(同前)うとの自らの深い領きを抜いて真実教はないとの確信がある。

宗祖は、経典を分類し教理を解釈した結果によって真実教を主張するのではなく、わが身に現にはたらく本願に遇い得た感動において『大無量寿経』をこそ真実教といただかれたのであろう。つまり文言の逆説は、「浄土真宗」の意義を確かめることにあった。宗祖における「浄土真宗」とは、一宗一派の名ではなく、本願に遇い「凡小」「群萌」なるわが身に遇う、「大乘のなかの至極」(聖典六〇一頁)たる仏道の名として語られているのである。

しかも宗祖は、それを自らの主張においてするのではない。「智慧光のちからより本師源空あらわれて浄土真宗をひらきつつ選択本願のべたもう」(聖典四九八頁)と、すでに師法然上人が、本願との値遇にこそ凡夫が救われる仏道、すなわち「浄土真宗」があることを教えてくださっていたことに万謝の念を込めてうたわれる。

凡夫の領き

前出のご門徒の命終に際し、「念仏はなるほどそうかという世界。なるほどそうかと言える世界が見つかった人は、広い道を堂々と歩いていける。なるほどそうかという世界を知らない人は、狭い道を肩をいからせて歩いてゆかねばならない」との曾我量深師の言葉が想起された。「なるほどそうかと言える世界」とは、自己を知らせてくださる本願への領きであるのと同時に、このご門徒の言葉に即して言うならば、「根性だけは曲がっつる」と自らのありようを仏法聴聞の中で知らされることを言うのであろう。

そしてそれは、その家に念仏相続され育まれてきた浄土真宗の風趣の中で教えられた「かっちゃんおじさん」にとっての、宗祖の領きにも重なる「顕真実教」といえる確信であった、と今いただくところである。